



芥川「蜘蛛の糸」その極彩色なる「蓮」の花とは  
—作品の「本質的な問題」に隠蔽された「エゴイズ  
ムの極め」—

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-04-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 荒木, 美智雄 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00008909">https://doi.org/10.32150/00008909</a>

# 芥川「蜘蛛の糸」その極彩色なる「蓮」の花とは

## ―作品の「本質的な問題」に隠蔽された「エニイヌムの極め」―

荒木美智雄

### 一、はじめに(本論究における動機付け)

「国語を学ぶ会」および「札幌国語教育研究会」の共催で二〇二〇年二月一日「西原千博先生御退官記念シンポジウム」が開かれた。その時、西原千博氏(註1)が発表された「文学研究×国語教育」芥川龍之介「蜘蛛の糸」の教材分析を中心に「の発表を受け論議が交わされた。その時、終了時間直近という制約もあり、私の「蓮」の疑問点等が、解明されず数々の論点が残された。その解明を試論として、私の新たな「蜘蛛の糸」論をここで整理して見た。その時に私が提起した諸論点は、次のような「疑問点」であった。

- ①「蓮」の花が六回冒頭で四回、最終段落で二回も使用されているが、その意味は何か(「蓮」はこの作品の主題に直結する?)
- ②しかも、「蓮」が修飾される言葉は「玉」「金色の蕊」「翡翠の葉」と、明確に作者は、過剰なる修飾を施す謎とは何か。
- ③また、極楽の蜘蛛が出す糸は「銀色の糸」と「語り手」が意識的に差別化している。その意味するものは何か。

④ 犍陀多のぶら下がった糸は、どうして切れたのか(数限りない)

罪人がぶら下がっても無事であったのに、犍陀多の「声」と切断とはどんな因果関係があるのか。

⑤ 犍陀多が糸の切断で落ちた「闇の底」とは、「羅生門」の「夜の底」とどう関連付けることができるのか。

⑥ 時間の経過がたった朝から昼までの短い「極楽」の時空感覚を支配しているのは、一体何なのか。(第三段落問題)

(※傍線部は、研究史の中では、私の新たな視点の問題提起) 研究会では、こんな疑問を素朴に呈したのだが、時間切れで十分な討論もできず、私自身の脳裏に「残滓」として沈殿し、最近大きな比重をしめるようになっていった。今回、またとない機会なので、これらの疑問を深く論究していきたいと思う。この「蜘蛛の糸」については、多くの研究者が、「教材研究」を行っているので、その成果も十分加味しながら、関連性に熟考し深く論及していきたい。

### 二、西原千博氏の論考と「他者」論による読解論

まず、西原千博先生の論考は『お釈迦様』への不信感を中心

に」とタイトルにある通り、お釈迦様の「気紛れ」で毘陀多を救おうとしたが、全く不可能な難題を敢えて与えられ、失敗する姿を、傍観者の如く「浅ましい」と断を下す。

これらについて西原氏は、最後、「別解批評の楽しみ」として四点指摘しつつ整理している。A「お釈迦様の批判説」不信感」、B「偶然と必然という矛盾」説、C「見ることしかできない悲しみ」説に言及し、最後にD「刹那の感動」に蜘蛛の糸の切れ端」説などは、興味深い論点の提起だと考える。また、原典の『因果の小車』や芥川の他の「作品」と比較検討しながら、多様な解釈の可能性を求め、そこに《批評の快楽》を訴える着地点は、多くの示唆を与えてくれた素晴らしい発表だと思われる。ただ、前述した私の「謎・疑問」が解明されず、残されているので、これらの点を充分踏まえ、さらに考察していこう。

ここで、一点指摘したいことは、最近の国語教育の研究会での動向をめぐる「ある問題」である。それは田中実氏の主張する「語り」を最重視する（他者）論Ⅱ（第三項）論」による「蜘蛛の糸」の実践成果である。その実績ある論考では、斉藤知也氏と須貝千里氏（『文学が教育にできること』「読むこと」の秘鑰』教育出版）等がある。田中実氏の提唱する、ソシユール言語学から発展させたロラン・バルト論を発展的に継承し、「読むのアナーキー」論を超越して、〈第三項〉論に至る「作品論」は、画期的な成果を収め、文学教育の国語教育界に革新をもたらした

点で、大いに評価したい。ただ、その思考過程が、あまりに難解な「哲学」理論を含む故に、国語教師にとつては、より簡潔な解釈が、今求められている。

そんな時、大澤真幸氏の見解に出会い同じ観点と推察し、参考にすべきではないかと思いついた。それは、こんな「見解」（二〇二二年十二月五日『朝日新聞』大澤真幸「人間とは漫画から考えた」）である（註②）。

作者が心血注ぎ、夢中になって描いた物語には、作者自身も意図しない無意識のレベルで、社会や人間の本質的な問題が投影される。それを掘り起こし、心が動かされた理由を言葉にできれば、思想や学問として成り立つ。

私たちが読む作品の「本文」には、作者の無意識（作者の作品意図の超越）の本質の問題が隠され、その「意図」に迫ることは至難の技であるが、その無意識の（財宝）を探り、言語化する「思考過程」こそ、「新しい作品論」つまり、〈第三項〉に近いのではないだろうかと思える。作者が、生命を賭けてまで心血注いで書き残した結晶たる「本文」をいくら熟読しても、了解不能の「意図」本質的な問題」が常に存在する。それを探し求めることこそ、西原千博氏も指摘するところの、多様な解釈の「批評する快楽」と重なると考え、この論考を書き進めたい。

### 三、「羅生門」と「蜘蛛の糸」における〈第三項〉とは

ここでいう〈第三項〉と、到達不可能であり、同時に了解不

能の《他者》Ⅱ「客体そのもの(原文)」のことである。これは、作者が無意識に意図した作品の隠れた《主題Ⅱ本質的な問題》と私は、考えるが、「蜘蛛の糸」以外の、芥川の他の作品で例えてみよう。

では「羅生門」では、この《第三項》に沿ってどれだけ教材研究がなされたのかを考察する。一般的に「羅生門」の主題では三点、①「エゴイズム(吉田精一)」②「無明の闇(三好行雄)」③「論理観の束縛からの解放(関口安義)」等が主要な主題論として議論されてきた。しかし、私は、主題に関わる大問題として「死人Ⅱしにん・しびと」の取り扱い方に注目したい(註3)。

羅生門の下に放棄されるのが死人である。一方、羅生門の中で老婆が、《悪の論理》でその死体を生活の糧として活用するもの、それは「死人(しびと)」である。羅生門下で、その他多くの遺棄される死体が死人として、芥川はルビをふらず、「しにん」と読ませる「仕掛け」を施している。しかし、老婆は、蛇の皮を干魚だと偽って商いをしていた女の髪の毛をカツラにして、生活の糧にする「死体」を取って「死人Ⅱしびと」として、明確に意識化しつつ、決定的な《ルビ》をふる。あたかも人間そのものとして人格的な尊重を施すようにで、ある。

下人は、老婆の着物を剥ぎ取って羅生門の外に出ていく時、老婆は髪の毛を逆さにして、その世界を垣間見るのだ。その世界とは、「夜の底」に広がる「黒洞々たる夜」である。これは、

誰も救済されない弱肉強食たる暗黒世界であるが、(羅生門の中)は、まだ《悪の論理》に支配された「死体」さえ、「死人Ⅱしびと」として人間的な人格を施された「世界」と読むことも可能であろう。この羅生門の《外》と《中》との対比は、決して見落としてはいけない論点であると私は考える。だからこそ、芥川龍之介はこの作品を「羅城門」から「羅生門」として「生(死)」を題名に刻印することを忘れなかったのではないだろうか。

では、「蜘蛛の糸」が提示する「無意識の本質問題Ⅱ《第三項》」とは何か。お釈迦様の「気紛れ」を基調として描き、無理難題を強制され、結局、奈落の地獄に陥落する犍陀多に哀れみを抱かせることだけが主題であるのか。最も重要な点は、最大限の修飾語で彩られる「蓮の花」の描写(形象豊かな表現箇所)である。蓮の「白」を修飾する「玉のような真つ白」さや「金色の蕊(すゝい)の煌びやかさ、よい匂いが溢れるだけでなく、最後は「翡翠」のような色をした蓮の葉(その上に蜘蛛Ⅱ銀色の糸)」と最上級たる極彩色豊かな自然描写は、芥川の隠された「本質的な問題」を象徴していると考えるのが妥当であろう。

また、「第三段落」の最終部にも同じ表現「玉のような白い花」「金色の蕊」が描写されているのだから、その二重性の深い意味付けは注目に値する。そして、最後の一文、「極楽ももう午に近くになったのでございませう。」という部分は、極楽世界を

完全支配する時空という「時間経過」の謎で閉じられている。

ここに、芥川龍之介の「無意識の意図」を考察せず、主題論を語ることは愚かなことではないかと私は考えるのだが、どうだろうか。では、この作品の成立経緯からみていこう。

#### 四、『赤い鳥』掲載の「蜘蛛の糸」という作品の特徴とは

芥川龍之介がこの作品を発表したのは、一九一八年(大正7)四月創刊号の児童雑誌『赤い鳥』の誌上である。龍之介の先輩鈴木三重吉が創刊した雑誌であり、「芋粥」が彼の推薦で文壇デビューできた恩義もあって、かなり苦勞を重ね執筆したと記録(小島政二郎宛書簡)にある。低学年向けの『赤い鳥』であるが、龍之介だけは高学年向けで、その作品の出来栄えに鈴木三重吉は絶賛の声を上げる。本来『赤い鳥』は、「子供の文章の手本を授け」「子供の純真」を「侵害」しないもの、「子供の純性を保全開発するもの」という目標を掲げていた。普通「童話」は、丁寧な日本語を推奨するために敬語を使い、啓蒙的であり、神々超越者に対して相対的な眼を持たないこと(批判性の回避)を主眼としていた。

しかし、龍之介の場合、児童文学の(本道)を空中楼阁と一蹴し、新作品として提示される。それは、「語り手」の敬語は唯一残しつつも、「語り手」の範囲を限定しながら、アイロニーやパロディを付加する斬新な作品として話題になる。これは、龍之介が原稿依頼の「童話」を取って(近代小説)として執筆

した故に、この「蜘蛛の糸」は、児童文学としてふさわしいのかという疑問が常に付きまとう。また、「失敗作」という数々の声も上がり、注目度は当時からきわめて高い。

「蜘蛛の糸」の材源は、三点あって①「因果の小車」②「一本の葱」③「わが主とペトロ聖者」、研究者の論考の成果では、「因果の小車」が材源とされる(註4)。両者の相違点は、隼陀多とお釈迦様との《対話》があり、蜘蛛の糸の降下が「仁愛の行」を試すことであるとお釈迦様から知らされ、その「仁愛の行」の失敗によつて糸が切断されるのが「因果の小車」、正に(因果(応報)であり、芥川作品にはそれが無い。

この「因果の小車」では、仏教の真髓が説かれ、「徹底的に悪の化身となる者はいない」(全世界を照らす光が)一筋の光が隼陀多の群れをも照らした。」と、仏陀の万人救済の道が罪人を含め全員に明確に記されている。しかし、龍之介の作品では、救済の試行という「糸の降下」の説明が全くなされず、仏教の説く万人救済を消去して、糸の切断で隼陀多を問答無用に地獄へと転落させる。故に「絶望の童話」と酷評される所以である。

しかし、この展開だけでなく、極楽の「審美的描写」と「心象風景」は、極めて圧巻であり、ここを語らずして主題探究は不可能であろう。明確に龍之介は「教訓」色と「宗教」色を排除しつつ、高い文学性を探究したことは、確かであろう。では、従来の「読解」による主題をめぐる論究に触れたい。

## 五、本作品の主題をめぐって従来の「読解」とその「批判」

一九六〇年代から小学校六年の国語教科書に掲載され、多くの支持を得てきた。その時の読み取りは、**【第一】**『道徳的な読み』であった。「人間本来のエゴイズムを深く考えさせられる」「香り高い文学作品」と山口静一氏などは評価する(註5)。それは、単純で健康的また楽天的な作品と捉え、幻想性やイマジネリを駆使しながら、大人の鑑賞でも耐えられる児童文学と評価する研究者もまた多い。

一方否定的な評価は、戦前から正宗白鳥『中央公論』昭和二年一〇月号等が有名で、極まり切った秩序ある世界をやすやすと受け入れて、そこに何等の懐疑の苦も感じていない「ストーブで温められた温室的書齋での仮寝の夢に過ぎない」と厳しく酷評する。吉田足日氏(註6)も、「二流の読み物」と酷評し、犍陀多が「悪」の勗善懲悪の説話に終始している点など「ヒューマンイズムの逆」となり名作を否定している。

また、従来の龍之介の童話は、「救いの童話」に対してこの作品は「絶望の童話」等という評価は、鋭い指摘であるが、これを「近代小説」と捉えた場合、その評価は全く異なるであろう。ただ、他の芥川作品の「童話的な作品」は、絶望的な厭世主義とは無縁である。

**【第二】**の読み取りは、『道徳的読み批判』である。国語の授業や「読書感想文」の記述では、釈迦⇨善犍陀多⇨悪という単なる「因果応報」式での読み取りに反発しつつ、無理難題を強要された犍陀多を免罪し、お釈迦様を批判する論調が多い。そこで、そのお釈迦様

批判を誘発する疑問を六点、ここで取り上げ、作品の核心部分を論究したい。

**【疑問1】**なぜお釈迦様は大悪人の犍陀多だけを救済したのか。

**【疑問2】**犍陀多の善行は「蜘蛛を助けた」というのは、単に殺さなかっただけではないか。

**【疑問3】**お釈迦様の救済は恣意的であり、これでは、犍陀多の被害者である殺人・放火された者は浮かばれないのでは。

**【疑問4】**犍陀多の叫び「下りろ」は利己主義だが、それは欲望を抑制できない本能的、普遍的たる「人間的な肉声」では。

**【疑問5】**お釈迦様は、当初から彼を救う意思はなかったのでは。

**【疑問6】**なぜ糸は切れたのか。本文に説明がなく、切れない別の方  
法はなかったのか。

これらの疑問は、犍陀多を免罪し、お釈迦様の「気紛れ」を指摘して、安易に二項対立(善と悪)に問題を収斂するのではなく、絶対的な「正義」や「宗教」的な慈悲の心を批判しながら、同時に芥川龍之介の利己主義に依拠し、事象の(相対化)を図るという「読み」が再提起される。では、先の**【疑問1〜3】**についてまとめて説明をする。

### **【疑問1〜3】…唯一、犍陀多のみを救済する謎をめぐる「論**

読者は、極悪非道の犍陀多が、単に蜘蛛を殺さず、見逃したことだけで救済の糸を降下することは、非合理と抵抗感を感じてしまふ。だからこそ、「出来るなら〜救い出そう」とお釈迦様は付帯事

項を課し、その糸に罪人が群がることも予想できたお釈迦様の提案が、無理難題の絶好の条件であり、救済する「神」の意思の脆弱さを、読者は痛感してしまうのだが、どうだろうか。

しかし、極悪非道の犍陀多だからこそ、その極悪人に相応しくない慈悲の心と自戒の念を抱いたからだと読み解くことは重要だ。普通の人間なら誰でも蟻や小昆虫に哀れみを感じ、踏みつけることに躊躇する。それが普通の人間にあらず、犍陀多だったのだ。

本来悪に染まっている彼は、地獄に落ちた今でも助けた「蜘蛛」のことを忘れられないのは、本来なら踏み潰し、何の感情も抱かないはずが、唯一、「蜘蛛」の姿に自分を投影させ、我が身を潰せなかったのではないか。「蜘蛛」はどれだけ多くの昆虫をクモの巣に掛けて、その儂い命を無残にも奪ってきたことか。その残酷な捕獲によってしか生きられない、蜘蛛の宿命に犍陀多は「小さな命たる己を見たのではないだろうか。それは、山本欣司氏が指摘する如く、「非力な存在のひたむきに生きる」姿に心打たれ、同時に「自己を相対化する深い自省の瞬間」だった(註7)のではないかと考えられる。この体験は、彼自身にも心に深く刻まれ、地獄の責め苦に喘いでいる時でさえ、忘却せずに残っていたのである。その希望たる「記憶の一片」がお釈迦様の眼に偶然留まり、彼だけに(全く恣意的ではな)極楽の蓮の葉にいる蜘蛛からの「銀色の糸」を授けたのである。

#### 【疑問4・5】「下りろ」たる「本能的な叫び」とその救済の意図

これは、原典の「因果の小車」では、お釈迦様と犍陀多との会話が

あり、蜘蛛の糸が「仁愛の試し」ということが明示されていれば、彼は、本能の声を制御しつつ、別の方法の選択もあったのだが、試行の告知がない故に、誰もが普遍的な「本能たる肉声」を誰もが発したと推察するのは妥当(疑問4)の解であろう。

もし仮に、犍陀多が、「恐怖心」の発露以上に「独占欲」に塗まされた「威嚇」エゴイズムの声を発しなかつたら、罪人が全員極楽へ入りきり、「地獄はからっぽになってしまう」(註8)という結果になり、初めから切れる設定(原典通り)だと、当然考え得ざるを得ない。

芥川龍之介は、童話ではなく、(近代小説を描くという主眼から、エゴイズムを主要な主題としていたが故に、「気紛れ」のお釈迦様が彼を心底から救済しようなどとは、全く考えなかつたというのが作者の本意(疑問5)の解であろう。

【疑問6】「糸は何故切れたのか。それを回避する「別解」はあるか」最後の【疑問6】である。犍陀多が「叫ぶ」までどんなに罪人がぶら下がつても切れない(銀の糸)は、無敵の糸。なぜなら、「翡翠のような色をした」蓮の葉に、極楽の蜘蛛が一匹、美しい「銀色の糸」を出していたという、極楽でも最強たる特殊な「糸」だからである。

したがって、原典や作品の趣旨も無視すれば、沈黙したまま犍陀多が静かに登り切れば、極楽へ到達したのかもしれない。しかし、「神の力」(独占欲の極みの叫びによる重力変化)故の切断という憶測も可能だが、切れる結末は、糸の「細さ」を多用する本文11次章鮮やかな描写が彩る。「真つ暗な地獄の世界で」蜘蛛の糸が、き

らざらと細く光りながら、月も星もない空の中途に、短く垂れている」という「情景描写」のなんと魅惑的なことか。これを描くことが龍之介の作品の「意図」であつたはずだと、私は考へる。

ここに「主題(地獄の暗黒)」が隠され、作者の無意識の「意図」を推察してしまふのだが、それは、後述したい。では、次に芥川龍之介がどんな本質的な問題を隠蔽しつつ、本作品を描こうとしたのか、その「主題」を解明したいのだが、その前に「作品」の文体とその表現について若干触れることを許していただきたい。

## 六、「蜘蛛の糸」文体自体による「言葉」と無意識たる意図

最初に「蓮の花」の極彩色に彩る「第一段落」と「第三段落」は、呼応しつつ、主題を見事に隠蔽している。芥川龍之介の練られた「構造的な『仕掛け』」により注目すべきであろう。また、この「作品」は、「ながら」という表現が、全体で一〇回も使用されている。いわゆる「童話」を音読する場合、この作用は、リズムミカルに朗読し易く、脳裏に響く展開の流暢さが込められ、独自の芥川文学の世界観を鑑賞するには絶好の趣であろう。

「蜘蛛の糸」は、(銀色)を意識的に演出しながらも、もう一つ「細く光りながら」「細く蜘蛛の糸」「細く光っている」「細く光ながら」と四回も使用し、切断する糸を暗示しているかのような表現である。

さらに、犍陀多自身を「自分(四回)」と多用している点も特徴的なことである。これは、「語り手」と犍陀多との一体化を図り、彼自身の特殊性が消え「哀れな一般的人間」を創出する効果は大きく、

利己主義の典型という烙印を彼に印象付ける。

では「主題」の問題に触れたいが、第五章の「道徳的読み」とその批判の枠組で論究した場合、「因果応報」という構造が浮き上がるが、その枠組を決定的に妨げるのは、「第三段落」の「悲しそうな」お釈迦様の「浅間しく思召されたのでございましょう」という表現であろう。この問題については、次章にて斎藤知也氏の論考があるのでその論考を踏まえて論究して行きたい(註9)。

## 七、最終段落の「語り」による「主題」論の諸考察

最終段落は、前段と明らかに異なりお釈迦様の内面ではなく外面の視点により「浅間しく思召されたのでございましょう」(説明推量)という、「語り」が展開させる。その考察に關して、斎藤氏を論考する前に、もう一人渡辺善雄氏の「創作の独自性」という研究成果を付加したい(註10)。渡辺氏が本作品の「創作」上の独自性として挙げるのは、四点①「原話の仏陀のパワーの削減と地獄と極楽との距離感(何万里)」②「巧みな犍陀多の『極限状況』の設定」③「釈迦の悲しみ」④「釈迦の悲しみにも頓着しない蓮の花」をあげ最後まで釈迦と犍陀多とのすれ違いのドラマが「断絶の冷たい美しさ」を指摘しつつ論を閉じている。ここに私が思考した「主題」(八章)と重なる点も多いので敢えて取り上げてみた。

①の問題は、「無力な犍陀多」と「無力な釈迦」でさまざま論じてきた点であるが、「地獄と極楽との距離感」は、本文に「何

万里」と表記されている、本質的な問い。最章にて触れたい。  
②は龍之介が意図的に舞台設定する過酷な「極限状況」。これも主題に直結するが、「羅生門」のそれ同様に見事である。八章で論ずることにする。③の問題こそ、最終段落の「主題」に関わる中心問題である。斎藤氏は、同問題を〈語り手〉が釈迦をどんな観点で、どう評価しているのかと問題設定を立てながら問う。

斎藤氏は提起する。〈語り手〉は、**安全地帯から「覗き眼鏡」で見ると、釈迦に「浅間しく」思う釈迦と同じ罪人を棚に上げて「こら、罪人どもおりろ」と喚びてしまふ釈迦多に対して相対的な視点で捉え、自分自身の位置を共に問わないものと、両者を否定的に見ている。自己認識を問わず、周囲の世界を裁断する自閉的な事象と捉える観点は、鋭い指摘である。この論点は、篠崎美生子氏が説く「人を殺す釈迦多を気まぐれに助ける御釈迦様と、虫を殺す蜘蛛を気まぐれに助ける釈迦多は、相似形を呈している」(註1-1) (太字は筆者)と同じ的確な指摘をする。このような両者への眼差しの中にある、釈迦と釈迦多とに共通する「浅間しさ」こそが、本作品の主題であるということに帰結することに私も賛同したい。**

「しかし」で再逆転する。

「極楽の蓮池の蓮は、少しもそんな事には頓着致しません」と地獄を含む極楽の世界をも冷酷に相対化する〈語り手〉の眼が

出現し、「逆転」によって、先の「主題」を希薄化させてしまう。斎藤氏は、この「蓮」の問題は、「頓着する釈迦」と「頓着しない蓮」を明示することで、〈語り手〉だけが「頓着(拘ること・批評すること)」しない蓮の花に気付いていることによって自身自身の立ち位置を問い直していると、結論付けている。

斎藤氏の「頓着」論について大変興味深く、基本的に肯首したい。でも、私はこの問題を芥川龍之介の「逆転の逆転」という「**《相対化》**尽し」と読み解きたい。極悪非道たる釈迦多の〈相対化〉を図り、神の尊厳性を〈相対化〉で剥奪し、単なる「傍観者」に落とし込んだ釈迦を語り、さらに釈迦を含む世界の「万事」、そのものさえ〈相対化〉させる超越者の「蓮の花」は、「玉のように真っ白」で「金色の蕊」の「なんとも云えない好い匂い」に溢れ、葉さえ「翡翠のような色」で称える彩りで表現される根拠が、ここにあるのではないか。それは全能たる存在者の見事な出現であろう。

では、最後に①の「地獄と極楽の距離」および、「地獄の真っ暗闇の世界」と「極楽の蓮の花」の関連性(作品世界の構造化)などを網羅的に言及し、この「論考」を閉じたいと考える。

#### 八、「蜘蛛の糸」を「羅生門」の如く形象的な「構造化」の試み

形象的な「構造化」の問題とは、「言語教育」を基礎基本としつつ、微分化する「形象化」の諸要素で徹底的に読解を施しながら、もう一度《総合化》によって還元する「読解」方法であ

る。すなわち、主題を含む作品形象の相互関係に着目して「図解化」を図るといふものである（註12）。

先に「羅生門」の図解を施せば、こんな図が描ける。

「京の都（羅生門の外部）」という領域の図。下人はその《日常世界》で、一人は雨やみを待つ。そこは、地震や飢饉で盗人の横行だけでなく、無数の死人に埋め尽くされた「夜の底奈落の底」地獄の如き世界」と同時に「黒洞々たる夜（暗黒の（無明の闇）」という世界が、「羅生門の内部」の外界を統べる。誰からも救済されず、無秩序・悪の支配が全てで、弱肉強食の世界そのものである。こんな不法世界に「下人」は放たれ、その「行方は誰も知らない」という一文で作品は終結する。

一方、その「外界」から〈隔離〉された「羅生門の内部」という図が描かれる。そこは「女が蛇を干魚だと偽って生計を立てる」論理が生きている。「老婆はその女の髪の毛をカツラにして生活の糧にし、生き続ける」。相对化された《非日常の世界》ではあるが、「しびと」死人」さえ「生存論理」悪の論理」一定の法の貫徹」で生かされ、その範囲内では悪さえも活かされる論理が存在する世界。その「羅生門の内部」から白髪を逆さにしつつ、老婆が覗き込む「外部の世界」は先の「夜の底」「黒洞々たる夜」が広がるという作品の世界観たる図を、私は思考してしまう。

では、「蜘蛛の糸」の世界とはどんな「構造（図）」をなすのか。

月も星もない《地獄の世界》は「どちらを見ても、真っ暗」「暗（やみ）の底」が支配して「針の山の恐ろしい針が光る」「血の池」が見える世界。「地獄の責苦に疲れはてて、泣き声を出す力さえない」「血の池の血に咽びながら、死にかかった蛙のように、ただもがいてばかり」の状況である。

何万里もある地獄と極楽の距離の途中で「自分がいた血の池は、今ではもう暗の底にいつの間にかかくれて居ります」という時間の遙かな経過を表現する中で、《無限の時間》と《果てしない空間》を包括する《闇の世界》である。

片や《極楽世界》は、蓮池には蓮の花咲き乱れている。その花は「玉のように真っ白」「金色の蕊」からは「何とも云えない好い匂が、絶間なくあたりへ溢れ」、蓮の葉の間から「水晶のような水を透き徹して」「覗き眼鏡を見るように」眺めることができる「仕掛け」であった。極楽の蜘蛛が「翡翠のような色をした葉」の上に「美しい銀の糸」をかけている。この銀の糸が「玉のような白蓮の間」から地獄の底へ降下されるのである。

「極楽を完全支配する蓮の花」とは何か。蓮の花は、真っ黒な泥の沼に葉を浮かべ、沼の底には無限の根を生やしているのだ。その泥とは対照的に《仏教の象徴たる》「真っ白な花」を咲かせるのである。その沼の泥の「暗黒」は、見事に地獄を捉えている。地獄の「闇」という、汚辱にまみれた悪の「泥」を常に栄養と化しつつ、育まれ咲き誇っている花が「蓮」の花である。

う。「汚辱の沼」たる地獄は、極悪が蔓延<sup>はびこ</sup>り、ドス黒く汚辱していなければ、その蓮の花の白さが保ち得ないのである。黒ければ黒いほど、その「蓮の花」の白さを増す定め。だからこそ、銀色であっても「蜘蛛の糸」は、犍陀多の傲慢さ故に、完璧に切断されなければならなかった根拠がここにある。

犍陀多が極楽に登り切ることが、絶対に不可能であり、「暗黒な地獄の下界下Ⅱ(奈落の底)」では、きらきらと細く光りながら月も星もない空の途中に、短く垂れている、「望み叶わぬ存在(仰ぎ見る希望の切れ端)でしかなかったのだ。その情景の中にこそ、この「物語」が成立しているのだと私は考える。

したがって、いつまでもいつでも極楽の世界を完全包括する超越者は、(地獄では責め苦たる無限の時間が流れていても)ここでは当然何事もなかったようにゆったりとした時間を司り、「玉のように真っ白」な花を咲かせ「金色の蕊」たる「好い匂い」が絶え間なく溢れているように施し、「お釈迦様の御足のまわりに、ゆらゆら毒を動か」(神さえも放縱<sup>はなはだ</sup>させて、その象徴的な全能性をここに誇示するのである。更なる「エゴイズムの極め」を求めるかのように)。

芥川龍之介は、こんな世界を描いたのではないだろうかとは、推察するが、どうだろうか。ご批判を乞う。(完)

〈註1〉西原千博。北海道教育大学教授。最近の著に『文学教材の

作品分析―批評の快樂をめざして』蒼丘書林。二〇二〇年がある。

〈註2〉真幸氏は、文学作品ではなく、「漫画」を読み解くために「作者自身も意図しない無意識のレベル」を取り上げているが、これは、文学作品の「到達不可能」の「了解不能の《他者》」すなわち「客体そのものⅡ原文」という理論とかなり接点を持ち得るだろうと考え、私は論じている。

〈註3〉荒木美智雄『月刊国語教育』二〇一〇年四・五月号東京法令。また『国語総合』明治書院 指導書 記号 国総354の「羅生門」の中でも図解(板書例)でも同じ解説を施す。

〈註4〉小出良幸「教材としての芥川龍之介『蜘蛛の糸』の作品論」『三部』こども発達学科研究報告 教師教育研究『札幌学院大学』

〈註5〉山口静一『蜘蛛の糸』とその材源に関する覚書』『成城文藝』一九六三年)

〈註6〉吉田足日『くもの糸』は名作か』『戦後児童文学論集2』一九五五―六四)

〈註7〉山本欣司「芥川龍之介『蜘蛛の糸』を読む」『弘前大学教育学部紀要』九八、二〇〇七年)。蜘蛛の救済は「極悪非道の罪人には相応しくない」説は、山本氏の見解。私は、他の昆虫ではなく、蜘蛛という昆虫の捕食で生きる生物だからこそ、我が身を投影した犍陀多の自戒の念を推察した点を加

味しつつ論じている。

〈註8〉酒井英行『蜘蛛の糸を切ったのは誰か』、『芥川龍之介作  
品の迷路』有精堂

〈註9〉斎藤知也『教室でひらかれる〈語り〉—文学教育の根拠を求  
めて』教育出版。二〇〇九年。

〈註10〉渡辺善雄『通説に挑む文学教材の研究 中学篇』鷗出版。  
原典の「因果の小車」を比較検討し、大学での講義も含めて  
多面的な論考を書いている。「因果の小車」の現代語訳は氏  
の解釈によった。

〈註11〉篠崎美生子「二項対立図式への疑問—『蜘蛛の糸』の試み—」  
『文藝と批評』一九九七年五月

〈註12〉小野牧夫『国語・文学教育の研究』秀英出版一九八五年。  
この中で「セメント樽の中の手紙」を論じ、形象の微分化さ  
れた表現を再度「総合化」によって「読み取り」の主題把握  
を試みている。

(あらきみちお／元北海学園大学講師)